入鄉誠可重　ふるさとに入るはよけれど
無印自堪悲　栄えの印なきぞ悲しき
鄉鄉忍相問　いとしきひとは問うに忍びず
鏡中雙涙姿　鏡のうちに涙ながさん

あのとき、李賀はこう歌わざるをえなかった。誰にも会いたくなかった。酒をくんで送ろうという友にも人づてにことわって、しょんぼり長安を立ち去った。

このたびの沈亜之の落第に、別れの席をつくらなかったのは、あのつらさを思いやったからだった。そのやさしさに感じたので、亜之はまたことさらに送詩を求めたのだ。その事情を語るのが序文の「ねぎらう銭も酒もない」と「ねんごろに請う」なのだ。

奉礼郎はひくい地位ではあっても官員にちがいなく、友を送る酒代くらいは、その気になれば借ることができたはずである。いくらさきの日の悲しさを思っても、しかし、きみもそうだろうからというのは、年長の友に対してはいうべきことばでなく、そこで銭と酒とのせいにしてみせたのだ。しかし、別れのことばをのべに立ち寄った亜之に、ことば通り酒を出さなかった、と考えることはいらぬ。酒などはどうでもよく、送るもののさりげないやさしさを、送られるものはまた、さりげなく受けとめていたのである。

沈亜之は後年、李膠という青年が落第して江陵に帰ろうとするとき「詩に序して李膠秀才を送る」という文章を書き、その中で李賀のことを思いおこしているのは、膠が賀を想起させるよう

の詩才だからと文中でいっているが、むしろ落第の人を送る立場になって李賀のやさしさがふいに甦り、そのなつかしさが眼前の李賀へのあたたかい思いやりとなったのではないだろうか。

1975 7.1

李賀文献目録稿 (三)

182 李賀詩校釈　李嘉言　語言与文学　一九三七年　古詩初探　古典文学出版社　一九五七年

183 李賀与晩唐　李嘉言　当代評論　一九四〇年　古詩初探　同

184 もうひとつの詩的宇宙　杉本秀太郎　中国詩人選集二集第二巻付録　一九六三年六月

185 Chinesische Dichter der Tang-Zeit (Unesco-sammlung Repräsentativer Werke Asiatische Reiche) Übersetzung Einleitung und Anmerkungen von Günter Debon. Reclam, 1964.

186 李賀の「馬の詩」と杜詩　荒井健　吉川博士退休記念中国文学論集　一九六八年三月

187 李賀感諷詩第三首及其英訳　鄭騫　現代文学　33号　一九六八年十一月

188 宮娃の歌―李賀と「春昼」―　草森紳一　別冊現代詩手帖「泉鏡花」　一九七二年一月

189 李賀論　鈴木修次　唐代詩人論　下巻　風出版　一九七三年四月

190 草森評伝　II・28（垂翅の客―婦人の哭声―）　現代詩手帖　一九七四年一月

191 中国文学史　吉川幸次郎述・黒川洋一編　岩波書店　一九七四年十月

192 李賀研究　一〇号　一九七四年十二月　独吟聯句昌谷詩（四）法華経薬草喩品　杜瑛　彭績
賈光　続　楚辞与楞伽　朱鈞尊　刊落凡庸　長吉七古五古　宣城本　劫灰飛尽、李長吉賞書

抄　李賀文献目録稿（三）後記

1973　草森評伝　Ⅱ・29　一九七五年一月
1974　同　Ⅱ・30　一九七五年二月
1975　同　Ⅱ・31　一九七五年三月
1976　同　Ⅱ・32　一九七五年四月
1977　李賀研究　一一号　一九七五年四月　畑野恵子「詩的感動について」　北中寒　李弄墓誌
　李神符墓誌「李神通」補遺　二〇世紀の李賀（五）朱自清・漆山又四郎　美感与聯想　牽強
　附会の大会　鞏青蛾　能改斎漫録（上）　正誤　後記
1978　草森評伝　Ⅱ・33　一九七五年五月
1979　同　Ⅱ・34　一九七五年六月

一九四四年五月十六日の〈昌谷〉

1975.7.2.

数年前、図書館で、防衛庁防衛研修所戦史室の著作である『戦史叢書』を見、その中から『一号作戦〈1〉河南の会戦』の一冊を抜き出して読んでみたことがある。李賀の家居の地昌谷がこの戦火のなかでどうなったか、と思ったからである。昨日、この本を借り出した。

「昌谷」の名は、この本には出ていない。清代にすでにその名の村落がなかったようだから、それは当然だ。しかし宜陽の西南の三郷という地名がしばしば見えその東端の渓谷が昌谷という

ことはわかっている。

一九四四年、すなわち日本の昭和十九年、中華民国の三十三年、五月十六日、第十二軍長水鎮附近追撃なるものが行われた。同書四五四ー四六一ページがこれにあてられる。そこから少し抄出する。

この日午後、天候やや回復して彼我の飛行機が戦場に活動し洛河河谷および洛陽上空では、戦闘機の空中戦も見られた。情報によれば、重慶軍はなお続々西方に退却中で特に宜陽ー洛寧ー盧氏道には、砲兵および車両を有する大縦隊が盧氏方面に向かっている模様であった。夕刻の空中偵察では、洛寧を中心とする東西地区にその大縦隊が認められた。第十二軍はこの日、長水鎮(洛寧西方一二粁)付近隘路口およびその西南方約一六粁の董寺集付近に重慶軍を圧迫撃滅するよう、各兵団の追撃を指導した。すなわち、戦車第三師団、騎兵第四旅団に長水鎮隘路口に突進して洛河河谷の隘路を閉塞させるとともに、この日十三時次のように追撃兵団にその目標を明示したのである。

一　戦車第三師団、騎兵第四旅団は前任務続行。

二　第百十師団は敵の北方および西方脱出を阻止するように急追し、主力をもって北方から董寺集、洛寧付近洛河河谷に敵を圧迫撃滅する。

三　第六十二師団は宝陽付近の攻撃に任じた部隊を、すみやかに主力に合流させ主力をもって洛河右岸を急追し董寺集付近隘路口に敵を圧迫撃滅する。

第三十七師団は主力をもって前任務を続行するとともに一部を楊庄付近に前進させ盧氏挺進隊の推進並びに前進地区の残敵掃滅に任じさせる。

仁軍「コ」作命甲第一〇四号　三　第六十二師団長ハ薗寺集附近ニ敵ヲ急追撃滅セバ機ヲ失セス所要ノ兵力ヲ以テ范鑫鎮附近迄突進シテ敗敵ノ撃滅及盧氏挺進隊ノ収容ニ任スヘシ

前日、沙坡頭付近の重慶軍を撃滅した騎兵旅団は、十六日六時、同地付近を発し、洛河右岸を四裏一張村寨一長水鎮道を一路西進した。……騎兵の後を追う歩兵にとって、左に迫った山々からの川は戦いの一つであった。三～五粁ごとに現われる谷川は幅五〇米前後ではあるが、前日までの雨で水量を増し、行軍で熱しきった将兵の足を冷やして心地よかったが、濡れた脚絆や靴底の水も乾かぬうちにまた次の谷川が待っている状態にはかえって疲れを増したのであった。正午前、蘇陽付近で、第三十七師団洛寧挺進隊と会い更に十八里ころには洛寧対岸寨子付近を通過西進した。

第三十七師団洛寧挺進隊は東北方遥かに砲声を聞きつつ七時、竹園灘を出発、蘇陽を経て洛河河谷を西進した。……十五時洛寧南側で約一〇〇〇名の重慶軍を撃破して夜半二時東王村に進進した。

戦車第三師団洛寧追撃隊は段村陣地を突破するや……夜間し突進を続け、十六日八時三十分韓城東方地区に進出した。韓城東方一粁付近には半永久築城の既設陣地があり、重慶兵を散見した。……東韓城東端の砲兵から猛射を受けたが……更に突進し、……重慶軍は潰走し追撃隊は東韓城から韓城に突入して韓城西端に兵力を集結した。重慶軍は西北方山地に向かい潰走したが道路上の

轍痕からみて、なお砲兵を有するものと判断された。……飛行機から次の通報を受領した。

一　三郷鎮から西長水鎮にわたり輜重車両続々として退却中なり

二　長水鎮以西においても退却中の部隊多し

追撃隊（捜索隊）は、引き続き追撃して夕刻三郷鎮に入り、さらに洛寧に向かった。

十二軍は、五月二十日、盧氏まで進撃し、方面軍命令により洛陽攻撃に転ずる。同書五一三、五一四ページに、この五月中、下旬の中国側記録（抗戦簡史）の要旨が掲載される。

五月八日、龍門高地は完全に攻略され、湯恩伯軍の西進部隊も徒らに伊河上流地区に逃走するのみで、適時挟撃の効果を発揮しなかった。かくて蔣鼎文長官の麾下軍である偃師、洛陽およびその以西地区にある大軍は、非常に脅威を受け戦線を新たに整理するのやむなきに至った。すなわち第十五軍（第六四　第六五師）と第九四師をもって洛陽を死守させ、第四集団軍（第三十八第九十六軍）を韓城、藉池地区に集結し、また劉戡兵団（暫編第四軍）を宜陽から石陵地区にわたり集結して澠池から分かれて洛陽および洛寧に進撃する日本軍の側面攻撃にあたらせた。しかし……劉戡兵団は……腹背に攻撃を受け、やむなく逐次南方に向かって移動せざるを得なかった。同時に澠池付近の新編第八軍も西方陝県方面に移動した。……河南西方山地は、物資不足で軍民の給養十分でなく、蔣鼎文軍の指揮統帥は乱れるに至った。日本軍は、この機に乗じ突進し来たり、遂に十四日宜陽、十六日韓城、十七日洛寧、十八日陝県と相次いで攻略され、更に大営にし

迫ったので二十日には盧氏も遂に守備を放棄するに至った。……

これらの記事から想像するのに、この年の五月中旬には〈昌谷〉の住民は逃亡し、鶏犬もまた姿を消し、飢えて逃れる中国軍を、やはり飢えた日本軍が追う、悽酸な戦場であったようである。

記事には地図がついているが、わたしが知りたい山の名や川の名はほとんど見えぬ。しかし、わたしの手もとにある中国の地図のどれよりも、宜陽から西へ盧氏までの地名を多く記しているから、そこへ宜陽県志に記載される山名川名を想像しながら加えてゆく楽しみがある。宜陽県志というのは、一九六七年の四月に『宜陽県志』（光緒辛巳続修、宜陽県蔵板）から抜き書きしたわたしのノートをさすので、もとの『宜陽県志』を見にいったら、さらに気づくところが多かろうと思うが、それはまた後の楽しみにのこしておく。巻三は輿地で次のような記事がある

四至　東へ洛陽まで七十里（この里は清の里だから辞書新字源付録によれば五七六メートル、なお唐の一里は五五九・八メートルだそうだから、一里で一六・二メートルの差があることになる）。西へ永寧城まで百一十里。南へ嵩県城まで百二十里。北へ新安城まで五十里。（洛陽から宜陽まで四〇・三二キロ、宜陽から永寧まで六三・三六キロ。

八道　東道は城（宜陽県城のことか）から二十五里（一四・四キロ）の苗馬村の東半里はかりで洛陽県界に入る。西道は城から一百里（五七・六キロ）の馮庄で永寧県界に交叉する。南道は城から四十五里（二五・九二キロ）の南苗村の南五里（二・八八キロ）はかりて嵩県界に入る。北道は城から二十五里（一四・四キロ）の北苗村の北五里はかりで新安県界に入る。東北道は城から

二十五里の延袤で洛陽県界に交叉する。東南道は城から五十里（二八・八キロ）の宋店の東一里で嵩県界に入る。西北道は城から九十里（五一・八四キロ）の藕池で潮池に交叉する。

山また山の地形だから、山や川についての記述は豊富だ。名前だけは全部、説明は必要と思われるものだけを書きぬく。

錦屏山　城南数武（武は歩と同じで歩は一・六メートルだが　数武というのはついでにこにというほどの主観的な表現だ）。その最高処が玉柱峯だ。『通志』（河南通志からの引用）錦屏山は宜陽県南門外にあり、唐の武后がここに行幸して名を賜うた。その中で聳然として特出する一峯を玉柱峯と号する。下に烟霞亭の遺趾がある。（錦屏山は東西に十二峯。東からいうと、挑花、奎壁、煙霞、老人、玉柱、棲雲、香山、書帯　文筆、雙碧、太獅、夕陽）

鐘山　亀山　半壁山　黄金山　金牙山　臧龍山　寿安山　虎山　龍山

總鶴山　城の東南四十里（二三・〇四キロ）にある。伝えでは周の霊王の子の晋が仙人になり緱氏山から鶴に乗って、ここで休憩したという。今は高山とよぶ。

石墨山　公山　馬蹄山　神峪山　鳳凰山

黄帝山　城の西十八里（一〇・三七キロ）にあり、上に軒轅黄帝廟がある。

小富春山　城の西八十里（四六・〇八キロ）の厳過村にある。按ずるに、山は厳過村の南にあり、青い山壁が稜稜として石骨がむき出しになっている。上に厳子陵の廟がある。伝えでは、厳子陵がかつてこの村を通ったのでその名がついた。（厳子陵は、後漢の光武帝の少年時代の友。光武が帝位につくと　隠者となって仕えなかった）

女几山　一名、石雞山。『広輿記』にいう、蘭香神女が昇天し几（肘かけ、おしまづき）をここにのこしていった。ある説では、（晉の）彭娥のことで、彭娥ののこした器が石に変じ形が鶏に似ていた。そして山の形が几に似ているので名づけた、という。どちらが正しいのかわからぬ。『府志』巻九山川志に。陰山のまた東、宜陽と嵩県を界するのが女几山すなわち姑媱山、一名宜陽山。『山海経』姑媱の山で帝女が死んだ。その名を女尸という。変化して葛草となり、葉は重なり合い、花は黄で、実はネナシカズラみたいで、これを服用すると人を魅惑する。また名勝志、女几山は宜陽の西九十里（五一・八キロ）、これが晉代の女彭娥の汲器が変化した土地だ。按ずるに、女几山を俗に化姑山というのは、『山海経』の姑媱の山のことだ。ただ経には女尸とするのを後人が女几とした。尸と几はまぎれやすい字だ。『水経注』にはまた女机とするのだから、神女が几をのこしていったという説もきっと伝えがあるのだろう。名勝志にいうように彭娥の汲器が変化したのだとすると女几は女汲とすべきだろう。両説を並存しておく。『禹貢推指』洛水はまた東流し渠谷水に合する。渠谷水は宜陽県南の女几山から出る。女几山はいま県の西にある。『晉書』張軌伝。軌は少年のころから明敏好学で、同郡の皇甫謐と宜陽の女几山に隠居した。『隋書』地理志。河南郡宜陽県に女几山がある。『新唐書』地理志。河南府福昌県に女几山がある。『元和郡県志』河南府福昌県に女几山がある。『文献通考』輿地考。宋河南府福昌県に女几山がある。『金史』地理史。河南府の宜陽県と宗州の福昌県に均しく女几山がある。『明史』地理志。河南府宜陽県の西に女几山がある。『水経』の洛水注。渠谷水は宜陽の南の女几山から出て東北流して雲中塢を通る。左上ははるかに重畳する峻嶺で流烟が半ば垂れ山阜にかかっている。だから

塢の名がある。『水経』伊水注。七谷水は女几山の南の七溪から出る。山上に西王母の祠がある。東流して伊水に注ぐ。蜜谷水は女几山の東谷から出、東へ故亭を通って南東流して伊水に入る。『方輿紀要』宜陽県の女几山は県の西九十里にある。（このあとに金の元好問の「二竹禅院記」唐の李賀の「蘭香神女廟」彭而述の「洛水操」を引き、編者の次の案語がある）按ずるに、女几山は県西三郷鎮にあり、洛河の南で、三郷の漢山と相対している。また旧志の女几山について考えてみるのに、広輿記を引くものは県からの距離をしるさぬ。いま元和志に拠ると福昌県西南三十四里にある、という。通志、方輿紀要は宜陽県西九十里にあるという。里数がすこしちがう。しかし、元和志の福昌は唐の県で、今の県城の西六十五里。それならば通志、方輿紀要のいう県西九十里にある、というのは間違いないのだ。山には仙人諸峯があり元遺山文集に見えるので摘録した。また旧志を考えてみるのに広輿記の白蘭香神女のことを引くのは怪誕に近い。しかし唐の李賀の昌谷詩の元註に、武后の巡幸路、蘭香神女廟中の路なり。また。昌谷と女几と嶺阪あい承け、山は即ち蘭香神女上昇の処なり。遺几あり、という。唐代にすでにこのような説があったのだ。杜蘭香のことは晉書の文苑傳中に見え、詩人学士がつねに引いて吟詠の助けとする。これまた相似たたぐいだろうか。

白馬山　城西八十里にあり、金門山と相接する。

岳頂山　花果山　嶢山

漢山　三郷寨の北にあり、古柏が蒼鬱として、後漢の光武帝の廟がある。

紫羅山　城西六十里の紫羅村にある。按ずるに紫羅は今の神后村だ。

湖山　秦山　露宝山　襄頂山　鹿蹄山　香爐山　五龍山　蓮花頂山　雞冠山
万安山　趙保の南にあり、山下に唐の武后の興泰宮の故址がある。
洛山　擅山　傅山　大山　陰山　大安山　轎頂山　三塗山
金門山　『後漢書』郡国志。宏農郡宜陽に金門山があり、山の竹で律管をつくる。陳俊伝。大司馬の呉漢はみことのりをうけ俊を張弩大将軍に任命し、別に金門白馬の賊を河内で撃たせ、みなこれを破った。注。金門も白馬も山名で、いまの洛州福昌県の西に金門水、白馬水がある。たぶん、この二水に起こった賊だからそう名づけたのだろう。
熊耳山　嶕嶢山　鳳凰嶺　長野嶺　走馬嶺　蓮華坡　虎頭崖　陶公洞　馬明王洞　樓雲洞　槃玉洞　三官洞　九竜洞　換香洞　蔵氷洞　黄公洞　西仏洞
青陽洞　女几山簑にあり、呂謙恒の詩に見える。
水簫洞　三霄洞　九山洞
白馬谿水　城西八十里の三郷鎮の竹閣寺から西南流して洛水に入る。『水経注』白馬谿水は宜陽山から出る。澗には大きな石がありそのさまが馬に似ている。だから谿澗はそこの物や色をもって名づけられたのだ。谿水はまた東南流して洛水に注ぐ。『府志』洛水。また東して宜陽に入り右てで白馬谿水と合する。按ずるに白馬谿水は今は流谷水である。宜陽県西八十里にある。
昌澗水　城西八十里の三郷鎮の東で、すなわち昌谷水である。昌谷水は陝州から源出し、連昌宮の南を通って洛水に入る。『水経』洛水はまた東流し、陽市の邑南を過ぎて昌澗に注ぐ。昌澗水は西北の宜陽山から出て東南流し宜陽の故郡の南を通る。もとの陽市の邑である。これはもと

洛陽の都の典農治（農林省庁所在地というほどの意にあたろうか）だった。これは後に郡に改められた。昌澗水はまた東南流して洛水に注ぐ。『明史』地理志。永寧に大宋川があり、下流が宜水である。『方輿紀要』昌谷水は県西九十里にある。すなわち永寧の刀轅川である。陝州界から源出し東南流して洛水に入る。『府志』洛水はまた東流する。昌澗水が東南流してこれに注ぐ。即ち大宋川、また宜水ともいう。　按ずるに、大宋川は一名錦陽川で宜陽の一合塢の西にあり洛水に入る。『水経注』に昌澗水は一合塢山を通る、と記すのはこの川である。

杜陽谿水　『水経』洛水はまた東北流し于父邑の南を過ぎて洛水に注ぐ。杜陽谿水は一合塢の南を通る。一合塢城は川北原上にあり、高さ二十丈、南・北・東の三箱は天険である。（箱とは穀倉をいうのであろうか）ただ西側だけとりでを築いてある。一合の名はそこから起った。劉曜が河南を攻めようとしたとき晋の将軍魏該がここに逃げた。もとの于父邑である。洛水はまた東し杜陽澗水と合する。杜陽澗水は西北の杜陽谿から出て、東南流し一合塢の東で槃谷水と合し、乱流して東南で洛水に入る。『方輿紀要』刀轅川は陝州界より源出し永寧をへて宜陽に至り洛水に入る。また昌谷水という。『府志』洛水はまた東し一合塢の南を通る。杜陽谿水がこれに注ぐ。即ち刀轅川。　按ずるに刀轅川は宜陽の三郷鎮の東にあり洛水に入る。三郷は三箱のなまったものだ。『水経注』に、一合塢は三箱峭絶、というのはこれだ。塢は三郷鎮の西北高原上にある。塢の西南に竹園寺水があり、塢の南にまた両小水があり、乱流して洛水に入る。『水経注』に、杜陽谿水が一合塢の東を通る、というのが刀轅川水だ。槃谷水と合する、というのが塢前の数小水だ。『紀要』と李氏の『通志』が刀轅、というのが昌谷上流の大宋川で、即ち今の刀轅川だ。（編者）

按ずるに、杜陽雑編は即ち昌谷で、名を異にするだけのものである。『府志』が二つに分けているのは別に根拠があるのであろう。いまはこうしておく。

渠谷水　金線水　西度水　厭染水　鹿泉水　矢水　臨亭川水　豪水　黒澗水　虢水　恵水　蓼溪水　鳳凰川　鹿跑泉　柳川　噴玉泉　蟠龍川　浄眉川　周公泉　三泉　石鼓泉　馬跑泉　野狐泉　泊池　蓮花池　疊石溪　蘭溪　甘溪　胭脂潭　女娥潭　龍潭　氷井　聖井　板倒井

渠谷水以下についても書き写したいことが多いが、すべて他の機会にゆずる。ここに写したものからだけでも察せられるように、昌谷は古来しばしば戦場であった。戦争は殆ど常に自然の地形を激変する。李賀の家居したころの昌谷は、かれの夢想に彩られてかれの昌谷諸篇に保存されたもののほかは、消滅したのであろう。

一九四四年の七月から八月にかけての約一ヵ月、わたしは、河南省の鄭・開封・新郷などを転々とした。洛陽、宜陽の方向をやけつくような思いで望んだだけだった。新郷から汽車で三十分〔?〕ほどの村で一週間ばかり泊めてもらった家の主は宋儒程明道の子孫ということだった。その主の男の子は片手の小指の根もとからもう一本小さな指が生えていた。本人も周囲の人も、それを別に何とも考えていないようだった。利発なその子と仲よくなり、つないだ手の六本目の指の手触りは、わたしに水のような怒りを感じさせた。家の主は、夜が明けると、箕と鍬を妻から押しつけられて家を出た。畑につくと、ぽつんと一本きりのこされた冬しい陰でごろりと横になった。その一日が、続く三十年の歳月よりしまざまざと、わたしに甦ることがある。

1975.7.12.